

自衛隊のなかのキリスト教 (研究ノート)

石川 明人

(和文要旨)

日本では 19 世紀の陸海軍設立当初から、牧師や宣教師によって軍人伝道がなされていたことはよく知られている。戦後に新たに自衛隊が誕生してから数年後には、一部の自衛官たちにより、これまでの軍人伝道の歴史を踏まえたかたちで、コルネリオ会という防衛関係者キリスト教徒の会がつくられた。彼らは祈祷会や聖書研究会をひらき、ニューズレターを刊行し、また世界各国の軍隊における軍人キリスト教徒との積極的な交流もおこないつつ現在にいたっている。だが自衛官であると同時にキリスト教徒でもあるという立場には、さまざまな困難もあった。本稿では、そうした自衛官キリスト教徒の活動、考え、そして彼らの置かれている状況などを概観することにより、今後あらためて戦争と平和、戦争と宗教の関係について考えていく際の新たな視点を提供しようとするものである。

(SUMMARY)

It is well-known that missionary work for the army and navy was carried out in Japan by the clergy and missionaries ever since the army and navy were first established in the 19th century. The Japan Self-Defense Force was created following the war, and several years after its establishment, some members of the Self-Defense Force created the Cornelius Group, a Christian group for defense personnel, formed on the basis of the history of the past missionary work for army and navy. This group holds regular prayer meetings and bible study meetings, publishes a newsletter, and actively interacts with Christian soldiers in armies all around the world. Being a member of the Self-Defense Force as well as a Christian, however, poses various difficulties. This paper provides an overview of the activities and ideas of the Christian members of the Self-Defense Force and the situations into which they are placed and attempts to bring fresh perspectives for future examinations of the relationships between war and peace and between war and religion.

(キーワード) 自衛隊、キリスト教、戦争、信仰、軍人

(Keywords) Japan Self-Defense Force, Christianity, war, faith, soldier

【1 防衛関係キリスト者の会「コルネリオ会」】

現在自衛隊には「コルネリオ会」というキリスト教徒のサークルがある。これは陸海空自衛隊員（幹部・曹士・防大生・教官・事務官）およびその家族やこれに関係するキリスト教徒が、共に聖書を学び、信仰と交わりを深めることを目的とした集まりである。プロテスタント、カトリック、無教会など教派の別を問わず、聖書研究会や修養会、祈祷会などを開催し、また『ニュースレター』の発行をおこなっている。2010年現在の会員数は約250名である¹。19世紀の日本陸海軍創設時から牧師や宣教師によって軍人伝道はさかんになされており、コルネリオ会はその精神を継承することを意識しつつ、1954年の自衛隊誕生の5年後、1959年5月23日に東京の美竹教会で発会式がおこなわれた。

キリスト者軍人の会（OCU、Officer's Christian Union）が最初に生まれたのは1851年の英国で、後に各国の軍隊にもつくられていった。米国OCUは第二次大戦中の1943年につくられ、日本OCU（コルネリオ会）の結成が1959年5月であるが、奇しくも同年の翌月に第1回OCU世界大会が開かれている。OCUの大会は、その後も世界大会や地域別国際大会が開かれ、日本では1986年、1995年、2002年、2010年にアジア大会を開いている。今ではどの国でも会員を将校（Officer）に限定しないことからOCUとはいわず、MCF（Military Christian Fellowships）という名称が用いられている。現在の自衛隊では、国内・自衛隊内では「コルネリオ会」（Cornelius Group）の名称を用い、国際大会時など対外的にはJMCF（Japan Military Christian Fellowships）とも称している。

【2 コルネリオ会『ニュースレター』を読む】

自衛隊内のキリスト教に関する先行研究は、管見の限りこれまでほとんど見られない。また本稿は、あくまで簡単な問題提起を主眼とした「研究ノート」であり、文字数も限られているため、ここでは考察の材料を一次資料である『ニュースレター』（以下『NL』と略記する）およびその他の刊行物のみ限定することにしたい。

『NL』の発行は、コルネリオ会の重要な活動の一つである。内容は主に会員の

エッセーや行事報告などからなっており、そこからは各会員が実に真剣に「信仰」について、また「平和」について考えている様子が伺える。彼らに共通しているのは、自衛官およびその関係者であるということと、キリスト教徒であるということの二点だけである。よって神学的・政治的立場などに関して統一をはかることは一切なく、この『NL』も特定の信仰問題や政治・社会問題に関して会としての意見表明などに用いられる類のものではない。

『NL』が他の一般のキリスト教刊行物とくらべて特徴的なのは、記事の中に元日本兵の戦争体験や、牧師や宣教師になった軍人・自衛官の話題がしばしば見られることである。真珠湾攻撃に参加し機上から「トラ・トラ・トラ」（我奇襲ニ成功セリ）を打電した元海軍大佐の淵田美津雄は、戦後キリスト教徒になり宣教師として渡米したことはよく知られているが、彼が防衛大の聖書研究会に招かれ、全学生約 2000 名の前で講演をした際の報告などもある。またその他に、元軍人による寄稿で、戦死してもおかしくなかった場面で奇跡的に生き残ったことを神による恩寵として振り返っている記事などもいくつか見られる。戦時中は伊東平治という日本名で少年飛行兵となり、戦後は空軍そして民間航空に勤めたユン・クンソプは、後に韓国 OCU の総会長となり、さまざまな人々と協力して活動したことについて記事を投稿している。またある元海軍士官は 1937 年（日中戦争勃発）にドイツへ出張する直前に、鎌倉の雪の下教会で、第二種軍装に略綬を付け、短剣を下げた姿で洗礼を受けたという回想を書いている²。

単独で開拓伝道をする道を選んだ自衛隊の元三等海尉（少尉に相当）もいる。彼はもともとは日本基督教団に属していたが、その体制や思想があわなかったという。「自衛官であったことを否定的に扱われることに我慢が出来ませんし、日本人であることを、日本の伝統、文化を否定するようなことが、信仰の証だとも思いません」と言い「私は許されるなら、従軍牧師になりたかった」とも述べている³。

『NL』のいくつかの号には「コルネリオ列伝」というキリスト者軍人に関するシリーズ物の記事もある。一例として、榎本隆一郎の紹介がある。彼は海軍機関学校在学中に、軍人伝道に生涯をささげた宣教師エステラ・フィンチと黒田牧師と出会ってキリスト者としての道を歩むことになった。終戦時には中将まで昇進し、戦後は日本瓦斯化学工業を設立して社長、水交会会長もつとめ、また国際基督教大学理事長として福音宣教に奉仕した。

軍人や自衛官たちほど「戦争」の現実を肌で感じながら「平和」を祈る人たちもいないかもしれない。防衛大でおこなわれている聖書研究会でも、聖書の中の「殺すなかれ」「自分を迫害するもののために祈れ」という言葉を自衛官としてどう捉えるべきか、という議論が率直になされている⁴。もちろんその困難な問題に明確な結論は出ていないが、こうした問いからも目を背けることなく、しっかりと議論する場をつくって互いに話し合っている姿勢は十分に評価されるべきであろう。あるひとは次のように述べている。「自衛官が信仰を持って生きるとき二つの山があります。一つの山は国防を無視する教会であり、もう一つの山は宗教を無視する社会であります」⁵。宗教と軍事は、どちらか一方だけでも難しい問題であるが、その両方に同時に関わっている自衛官キリスト者こそ、なおさらその思索と祈りは真摯であるように思われる。

はじめにも述べたように、コルネリオ会は世界各国軍の軍人キリスト者との交流も積極的におこなっている。2007年に台湾で開催されたアジア大会には、16カ国以上から約300名の参加者があり、2010年に千葉で開かれた東アジア大会には8カ国から115名が参加した⁶。日米のOCUで合同の修養会も頻繁に開かれ、米空軍のリトリートセンターにて日米合同のクリスマス会が開かれたこともある。また米空軍大学に留学中の自衛隊の一等空尉（大尉に相当）は、現地でも軍人キリスト者の活動は活発であると言いき、基地で開かれている聖書研究会にも参加していることを『NL』で報告している⁷。地理的に近い韓国OCU（MCF）との交流は特に活発なようで、韓国軍の従軍チャプレン制度をうらやましがめる声もある。最近では防衛大に韓国からの留学生も多くきており、彼らの中には近くの教会の礼拝に出席したり、防衛大で行われている聖書研究会に参加している者もいるようである⁸。個人レベルでも海外の関係者との交流は積極的になされている。ひとりの自衛官は、都心に与えられた宿舎をコルネリオ会の集まりの場として活用できたことについて次のように述べている。「韓国の統合参謀本部議長の Lee Pil Sup 將軍、その信仰の盟友 Oh Hyung Jae 教授、在日米軍の AMCF 会員スタッフ、またペルーの AMCF 会長などは二度以上来られ、いわば「主の家」として用いられてきたことを誇りに思っています」⁹。

【3 人殺しと侵略を生業とする自衛隊員？】

近年、とりわけ 90 年代半ば以降は、自衛隊に対するイメージはそれ以前とくらべて大幅に改善されてきたようである。その理由としては、阪神淡路大震災での災害救援活動や、賛否両論はあったものの海外での平和維持活動等による印象の変化もあるかもしれない。また、2011 年 3 月の東日本大震災では 10 万名もの自衛官が派遣され、人命救助、遺体捜索、物資輸送等に重要な役割を果たし、誰もがそれを肯定的に評価した。だがしばらく前までは状況は違った。例えば立川市が自衛官の住民登録を理由もなく留保したり（1973 年）、また自衛官が職務上の必要から大学等への入学を希望しても、大学側から受験の辞退を求められたり願書が返送されたり、あるいは一部の学生から通学を妨害されるなどの事例も多くあった（60～70 年代）。太平洋戦争の記憶や憲法 9 条の観点などから、自衛隊とその構成員に対する社会の風当たりは大変強いもので、それは自衛官キリスト者においても同様であった。彼らに対する一般のキリスト教会や牧師、信者たちによる無理解や誤解も少なくなかったのである。1971 年にコルネリオ会会員で自衛官の矢田部稔が、教会関係紙『こころの友』に投稿したエッセー「ある三等陸佐の願い」と、それをめぐってなされた読者である牧師と編集部とのあいだのやりとりがある。一般の牧師と自衛官キリスト者との葛藤の一例として挙げよう。

矢田部の「ある三等陸佐の願い」は、題名の通り彼が三等陸佐（少佐に相当）のキリスト教徒という肩書で、青年時代におけるキリスト教との出会いや受洗への過程を綴ったものであった。いわば信仰についての簡単なライフヒストリーである。彼は防衛大学校に一期生として入学したが、父親を亡くし生活が楽ではなかった彼にとって、当時は進学先といえば学費のかからないここしか考えられなかった。そして彼は防衛大在学中にキリスト教と出会い、教会に通うようになり、3 年生の時に受洗している。矢田部にとっては、自衛隊、防衛大こそがキリスト教と出会った運命の場所であった。このエッセーは彼の「願い」として次のように締めくくられている。「私の願いは、重要でかつ困難な職務を担任する自衛官が信仰によって強められることであり、またミス・フィンチのように、あるいは明治の終りごろミス・テーラーが警察官に伝道したそうですが、そのように制服を着た人間の魂を求める伝道者をも日本の教会が生み出していきたいということ

であります」¹⁰。これは極めて個人的で素朴な、信仰者としての彼の思いに他ならなかった。

ところが、このエッセーに対して美祿教会牧師の岩本二郎は激しい批判を行った。岩本牧師はこれを掲載した編集部に対する批判として『教団新報』に、「軍国主義化の波はここまで来たか、と肌寒いものすら覚えた」と書いた。矢田部のこうした投稿を『こころの友』紙に掲載したことは「平和への努力を傾けてきた教団と教会の動きに逆行するもの」だと批判したのである¹¹。そして、「人殺しや侵略を生業とする自衛隊員は、実存的、社会的罪のただ中にある」と断罪し、「自衛隊と連帯するよりも、拒絶こそ、教団にふさわしいのである」と述べた¹²。岩本の一連の主張は、確かに彼の平和を願う気持ちに由来するものであろう。しかし、ここには彼の誤読、あるいは問題の誇張があるようにも思われる。というのも、発端となった矢田部のエッセーは、実際には岩本の解釈とは異なり、決して教団に自衛隊という組織そのものの支持を訴える内容のものではない。矢田部は「ミス・フィンチのように……制服を着た人間の魂を求める伝道者をも日本の教会が生み出していきたい」と言っているように、ただ素朴に自衛官という特殊な立場を理解してくれる信仰上の導き手を求めているに過ぎなかった。フィンチは 20 世紀初頭に日本で軍人伝道に生涯を捧げた人物だが、それは軍隊そのものを支持したのでもなければ、日清・日露戦争や第一次大戦を肯定したわけでもない。彼女はただ素朴に、軍隊という特殊な組織のなかで生活している人々とその家族を理解し、彼らのために伝道したのである。それから数十年後、キリスト者自衛官の一人が再びフィンチのような人物を求めるのは、むしろ謙虚な信仰者の姿であるように思われる。

実は、矢田部はおそらく日本で初めて「従軍チャプレン制度」に関する研究論文を発表した人物でもある。彼は陸上自衛隊幹部学校指揮幕僚課程在学中に、「戦場における士気について—宗教要員の活動が士気に及ぼす影響—」という論文を書き、それは 1969 年の『幹部学校記事』に掲載された。これは世界各国の従軍チャプレン制度を比較した優れた研究となっている¹³。「ある三等陸佐の願い」が書かれたのは、その論文の 2 年後にあたる。したがって、おそらく矢田部は諸外国の従軍チャプレン制度を念頭におきながら、また日本で軍人伝道に一生を捧げたフィンチらの姿を思い浮かべながら、このエッセーを書いたのである。自らの信仰を「神様

につかまった」と表現する矢田部は、たまたまその職業が自衛官だったに過ぎない。もちろん 20 代の進路を決定する時期に、いささかの迷いもなかったというわけではないようだ。しかし彼は、聖書の言葉、「召されたままの状態にとどまっているべきである」、「ユダヤ人を得るためにユダヤ人ようになった」などから、最終的には自衛官として生きる道を選んだ。「使徒言行録」にでてくる百人隊長コルネリウスの信仰も彼を勇気づけた。米軍や韓国軍をはじめ、諸外国には従軍チャプレン制度が当然のものとして存在することを知っていた矢田部のことを考えるなら、第二のフィンチを求める彼の「願い」の口調は、むしろ非常に控えめなものだったようにも思われる。

【4 自衛官キリスト者の立場】

『NL』には、「兎角反自衛隊的な空気の多い教会に於いてキリスト者自衛官のあかしを立てつつ苦闘しておられる兄弟もあるかと思いますが…」¹⁴といった文章がよく見られる。自衛官キリスト者は一般の教会のなかで居心地の悪い思いをさせられることも少なくなかったようである。元海軍士官でのちに海上自衛官となったある会員は、「自衛隊内においてキリスト教徒なる故に不利な処遇を受けることはありません。最高階級に進んで、最高の要職につかれたキリスト教徒自衛官は何人もおられます」という。しかし、自衛官であるということから「教会内で知的ななぶりものにされたという経験」があったという¹⁵。また、コルネリオ会創設時からの古い会員の一人も、「一部の教会では自衛隊さんは歓迎しないという雰囲気があることは否定できない」¹⁶と述べている。

日本基督教団は 1967 年に当時の総会議長鈴木正久の名前で「第二次世界大戦における日本基督教団の責任についての告白」を公表した。いわゆる「戦責告白」である。これは戦争責任を教団として謝罪することの意味について、また国策による教会の合同の意味を神学的にどう理解すべきかなど、さまざまな点から論争の種となったが、戦争の過ちを繰り返さず、平和を希求する宣言として極めて重要な意味をもつものであった。70 年代以降も自衛官キリスト者に対する教会や聖職者の視線が冷淡で不寛容なものになりがちであったのは、この時期にあらためて

「戦責告白」がなされたことの影響もあったのかもしれない。この傾向は 90 年代に入ってからもつづいたようで、反自衛隊の問題は 91 年の『NL』でもとりあげられている。教会関連の集まりに出席し、自分が自衛官だとわかると偏見や先入観に満ちた詰問を受けることが多く、「自衛隊は天皇の軍隊だ」「自衛隊と靖国神社との結びつきをどう考えるか」といった話題になりがちであるという。その記事の投稿者は、そうした場では、聖書にある「むしろ言葉、行動、愛、信仰、純潔の点で、信じる人々の模範となりなさい」という言葉を想起すべきであるとしている。教会のなかで不快な思いをしてきた会員は少なくないが、むしろそうした場を通じてきたことで、クリスチャン自衛官の信仰は強くなったのだとも述べられている¹⁷。自衛官キリスト者たちは、皮肉にも、自衛隊のなかではなく、すべての人を受け入れると自称している教会のなかで、その職業や立場を疑問視されるという、困難な状態におかれていた。ある会員は「コルネリオ会は、今後とも、忍耐強くあらねばならぬと思います」¹⁸とも書いている。

とはいえ、もちろん日本中のすべての教会や聖職者たちがコルネリオ会や自衛官に無理解だったわけではない。2010 年の軍人キリスト者東アジア大会では、日本基督教団総会議長の山北宣久牧師も出席し、説教をして彼らを励ました。そもそもコルネリオ会の発会式は都内の教会でおこなわれたのであったし、『NL』には牧師からの励ましの手紙などが掲載されることもある。自衛隊に十分な理解をもって接してくれる教会や聖職者はかつてもいたし、今でも決して稀ではない。

【5 軍人の信仰】

世界の多くの軍隊には従軍チャプレン制度がある。原爆投下の際には出撃前の B29 乗組員を前にしてチャプレンが神に祈りを捧げたことなどを考えれば、そうした姿には確かに違和感も感じる。だがその一方で、戦場で過酷な生活を強いられる将兵ひとりひとりのおかれた状況を考えれば、軍に聖職者がいることを一概に批判することも難しい。今の日本の宗教文化や憲法 20 条、89 条などを鑑みれば、自衛隊へのチャプレン制度導入は困難である。しかし国内外での災害派遣や人道援助など、自衛隊の任務も多様化していることを考えると、むしろ彼らの中にこ

そ、よきキリスト教徒が求められるともいえるだろう。

福音書によれば、イエスも百人隊長の信仰を評価した。内村鑑三も軍人に対する慰藉を自らの「非戦主義」に反するとは考えなかった。札幌バンドのクラーク、熊本バンドのジェーンズ、イエズス会のイグナティウス・デ・ロヨラなど、感化力の大きかった伝道者はいずれも元軍人であった。戦争が否定されるべきなのは当然である。だが「軍人の信仰」については、もっと様々な観点から考察、議論されねばならないことが多くある。

¹ 矢田部稔（元自衛隊陸将補・コルネリオ会名誉会長）へのインタビューによる（2010年5月28日千葉県にて）。また『キリスト教年鑑』（キリスト新聞社、2011年）を参照。

² 『ニュースレター』（1983年 No. 38）

³ 『ニュースレター』（1992年 No. 66）

⁴ 『ニュースレター』（1972年 No. 7）

⁵ 『ニュースレター』（1992年 No. 65）

⁶ 『ニュースレター』（2007年 No. 116、2010年 No. 125）

⁷ 『ニュースレター』（1976年 No. 17、1978年 No. 22、1974年 No. 13）

⁸ 『ニュースレター』（2004年 No. 104）

⁹ 『ニュースレター』（1996年 No. 80）

¹⁰ 矢田部稔「ある三等陸佐の願い」（『こころの友』1971年、第1531号）

¹¹ 岩本二郎「『こころの友』にたずねる」（『教団新報』1971年、No. 3683）

¹² 岩本二郎「連帯よりも拒絶を」（『教団新報』1972年、No. 3687）

¹³ 矢田部稔「戦場における士気について—宗教要員の活動が士気に及ぼす影響—」#12CGS 兵学研究論文要約（『幹部学校記事』1969年8月）41—54頁。

¹⁴ 『ニュースレター』（1970年 No. 2）

¹⁵ 『ニュースレター』（1975年 No. 14）

¹⁶ 『ニュースレター』（1973年 No. 10）

¹⁷ 『ニュースレター』（1991年 No. 63）

¹⁸ 『ニュースレター』（1997年 No. 83）